

【特集：廣野喜幸先生ご退職記念】

廣野喜幸先生との共同作業

藤垣 裕子¹

教養学部報2025年2月3日号によると、廣野先生と私が初めて出会ったのは、当方が1981年に設立された基礎科学科第二（現在の学際科学科の前身）に一期生として進学した後、松本忠夫先生の生物学実習の場でのことだったようだ。私の記憶のなかでは、1980年代にKKK（基礎科学科研究会。堂前雅史氏、押田連氏、小松美彦氏などが所属していた）および河合塾小論文科（東大の大学院生が講師・採点者として多く働いていた。当時は河本英夫氏、金森修氏、瀬戸一夫氏、鈴木晃仁氏などが活躍していた）の2つのネットワークがあり、廣野先生も私も同様のネットワークのなかにいたため、何度も顔を合わせるようになったのが知り合いになるきっかけだったように思う。大学院生時代、助手時代、折にふれて廣野先生に励ましていただいたことを覚えている。

廣野先生との共同が本格化したのは、私が2000年に科学技術庁科学技術政策研究所から総合文化研究科・教養学部にて助教授（当時）として戻ってきてからである。以下、廣野先生との共同作業を学会開催、科学技術インタープリター養成プログラムの運営と共編の本、廣野先生に原稿を書いていた本、の順で紹介したい。

<廣野先生と協力しての学会開催>

まず、2001年に創立した科学技術社会論学会（JSSTS）の第1回年次研究大会を2002年11月16日～17日に東大駒場キャンパスで開催した。藤垣は実行委員長として教室の貸出、大学院生バイトの配置、大会発表要旨集の印刷、などたくさんの仕事を抱えていたが、常に副委員長の廣野先生に相談にのっていただき、お世話になったように記憶している。発表件数は、23セッション（ジョン・ザイマンによる特別講演、シンポジウム1、ワークショップ2）84件、総

1 東京大学大学院総合文化研究科教授。

参加者数 232 人、懇親会参加者数 108 人であり、第 1 回大会にふさわしい盛会となった。実行委員会のメンバーは、藤垣・廣野の他、村田純一、橋本毅彦、岡本拓司、鬼頭秀一、丹羽清、嶋田正和、木原英逸、堂前雅史、綾部広則、調麻佐志、平川秀幸、中島秀人（事務局長）、小林傳司（会長）の諸氏であった。

次に、同学会の第 9 回年次研究大会を国際科学技術社会論会議（Society for Social Studies of Science）と共同で、2010 年 8 月 25 日（水）より 2010 年 8 月 29 日（日）までの 5 日間、東大駒場キャンパスで開催した。非会員を含め 958 名の参加者があり、うち外国人参加者は 42 カ国からの 674 名であった。25 日から 28 日までの 4 日間は英語セッションで藤垣が実行委員長兼プログラム委員長を務め、28-29 日の 2 日間は日本語セッションで廣野先生が実行委員長兼プログラム委員長を務められた。英語の一般セッションは、218 セッションが開催され、22 部屋同時並行で 11 のタイムスロットに分けられて運営された。また、「社会のなかの科学：21 世紀の科学者および市民の責任」というテーマで市民公開講座が 25 日午後に開かれた。さらに「グローバルな文脈のなかの科学技術と社会：文化の多様性と一様性」というテーマのプログラム委員長主催のプレナリが 25 日夕刻に、「ICT（情報コミュニケーションテクノロジー）の現在と将来」というテーマのプレジデンシャルプレナリが、27 日午後で開催された。日本語セッションでの大会シンポジウムでは、東京大学・伊福部達氏による講演「福祉工学の 40 年—当事者研究から学んだこと」および東京大学・熊谷晋一郎氏による講演「道具が手足になるには—自己決定と身体化の間にある矛盾」が行われた。

<科学技術インタープリター養成プログラムの運営と共編の本>

東京大学科学技術インタープリター養成プログラムは、科学コミュニケーション教育を推進するための文部科学省・科学技術振興調整費・新興分野人材養成プログラムの 1 つとして、2005 年 5 月に発足した。他には北海道大学、早稲田大学に同様の人材養成プログラムが発足している。発足当時の東大の代表は松井孝典氏であり、大学院の副専攻プログラムとして設計した。教員は科学技術プロパーの研究者群（上述の松井、生命科学者の黒田玲子、石浦章一、

長谷川壽一など）と、科学技術論の研究者（村上陽一郎、廣野喜幸、佐倉統、岡本拓司、藤垣裕子など）の2つの群からなり、協力して教育をおこなってきた。2009年に振興調整費の助成期間が終了し、東京大学総合文化研究科教養教育高度化機構の一部門となり、研究科の予算を用いて運営が行われている。科学技術の急速な発展により研究分野が細分化され、ブラックボックス化された結果として科学と社会との間に乖離が生じている現状に対し、科学技術の専門家と科学に慣れ親しんでいない人たちの間をつなぐ人材を養成することを目的としている。科学技術の担い手のもつ情報を一般市民に伝えるインタープリターと、科学技術に直接携わらない一般市民の実感や要望を科学技術者に伝えるインタープリターの両方がある。

一般に科学コミュニケーション教育では、「どう伝えるか」に焦点が当てられる。たとえばどのような表現・図を用いるとわかりやすく伝えられるか、どのようなメディアを使えば一般市民に情報を届けられるかといったことである。それに対し、当プログラムでは、「何を伝えるか」にも焦点をあて、一般市民に自分で考え判断する能力を涵養することも目的としている。たとえば、巷にあふれている情報やデータを鵜呑みにせず、その裏を読む力、判断の根拠となっている科学的知識は何かを問う力などである。単なる科学者の啓発活動ではなく、科学と実生活の橋渡しをしてくれる双方向性の人材を育てている。

藤垣は2012年度から2014年度まで本プログラムの代表を務めたが、廣野先生は2015年度から2023年度まで9年間にわたって代表を務められた。2024年度に当プログラムは20期生を迎えたが、その半分近くを廣野先生が担当されたことになる。

本プログラムに関連して廣野先生と一緒に編集した本は2冊あり、1つ目は『科学コミュニケーション論』（2008、新装版2020）であり、2冊目が『科学コミュニケーション論の展開』（2023）である。1冊目は、インタープリタープログラムが発足した直後、もっとも近い専門誌である *Public Understanding of Science* の17年分（1992年から2008年）を特任助教、特任准教授らとともに輪読会で読み込み、その内容をもとに章立てを考え、作り上げた本である。2冊目は、それまでのインタープリタープログラムでの教育の経験を元に、廣野

先生が展開された水平理論と垂直理論を基軸にすえて編集した本である。

<廣野先生に原稿を書いていた本>

インタープリタープログラム以外でも、いくつかの本のなかで1章分を担当していただいたことがある。1冊目は、『科学技術社会論の技法』（藤垣編、東大出版会、2005）のなかの薬害エイズの章であり、2冊目は『Lessons from Fukushima: Japanese Case Studies in Science, Technology and Society』（Fujigaki, ed. Springer, 2015）のなかの1章で、1冊目の本の英訳である。詳細な文献分析による情報豊かな内容であり、前者は教養学部1、2年生用の科学技術社会論の授業で使わせていただき、後者はPEAK（Programs in English at Komaba）3、4年生の授業 Science and Technology Studies の授業のなかで、2014年、2016年、2018年、2020年と4回使わせていただいた。3冊目は『科学技術社会論の挑戦』（藤垣責任編集、東大出版会、2020）のなかの第2巻第10章「生命倫理」の章である。これも力作であり、STSのなかで生命倫理の占める位置を明快に説明している。

以上のように廣野先生との共同は、STS学会の発展にとっても、科学技術インタープリター養成プログラムにとっても、そしてSTS関係の本を編む上でも不可欠であり、常に真摯に相談に乗っていただき、かつ質の高い論考を寄せてくださった先生にこころから感謝している。